The influence of speech-language-hearing therapy duration on the degree of improvement in post-stroke language impairment

メタデータ	言語: jpn 出版者: 浜松医科大学 公開日: 2017-07-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 林, 仁 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10271/3201

論文審査の結果の要旨

脳卒中後遺症言語機能障害に言語聴覚療法(ST)、作業療法(OT)および理学療法(PT)が処方される。STの処方時間の長さや脳卒中後遺症言語機能障害の改善度との間には不明な点がある。そこで、申請者は、脳卒中後遺症言語機能障害の改善度におけるST、OTおよびPTを検証し、更に年齢群別、認知症レベル別でも検証した。日本リハビリテーション医学会内のデータベースに登録された脳卒中後遺症の3,551人(約1/2が脳梗塞、約1/4が脳出血、約1/4がクモ膜下出血とそれ以外)を対象とした。解析は、プロペンシティブスコア作成後、逆数重み付け法で一般化推定方程式を使用した。目的変数は、入院時機能的自立度評価法(FIM)理解・表出・記憶の入院から退院までの変化を、不変と悪化/改善へ2値化し使用した。ST時間の影響をみる場合は、OTとPTを調整したうえで、短い時間群を基準に長い時間群のオッズ比をみた。OTとPTでも同様に調整した。

長時間のSTが行われた群でFIMの改善度が大きい結果が示された。FIM理解について、長時間のSTでは全体、64歳以下、重度認知症で有意に改善した。OTでは全体、55歳から64歳で有意に改善したが、PTでは有意差はみられなかった。FIM表出について、長時間のSTでは全体、64歳以下で有意に改善したが、認知症レベル別で有意差はみられなかった。OTでは54歳以下、PTでは、75歳以上と軽度から中等度認知症で有意に改善度した。FIM記憶について、長時間のSTでは全体で有意差はみられなかったが、54歳以下、重度認知症で有意に改善した。OTは全体、55歳から64歳、重度認知症で有意に改善した。PTでは有意差はみられなかった。以上の結果から、申請者は長時間のSTは、64歳以下と重度認知症患者の脳卒中後遺症言語機能障害を改善させることを示唆していると考えた。

審査委員会は、脳卒中後遺症言語機能障害に対する長時間のSTの有効性を見出したことを高く評価した。

以上により、本論文は博士(医学)の学位の授与にふさわしいと審査員全員一致で評価した。

論文審査担当者

主査 岩下 寿秀

副査 峯田 周幸

副査 永田 年